



「無園児家庭の孤立対策事業」

定期預り・子育て広場・SNS での相談

～つながりを大切にした取組みと行政の制度への移行～

特定非営利活動法人キッズスクエア瑞穂



- 1 【キッズスクエア瑞穂の概要】
- 2 【この事業に取り組むまで】
- 3 【2026 年度の事業について】
- 4 【事業の成果と今後の展望】





「子育ては 地域みんなで」を合言葉に

キッズスクエア瑞穂は、1993年「本巣南子ども劇場」から始まり、当時は主に幼児以上を対象に舞台鑑賞や体験活動を行っていました。活動の中で、保育園や幼稚園の入園以前のほうがつながりが薄く、孤独感を抱きやすいという声を聞き、乳児を含むすべての子育て世帯を対象に、文化と子育て支援を行う団体として「特定非営利活動法人キッズスクエア穂積・巣南」を設立。翌年の市町村合併を機に現在の法人名に改称しました。

現在は「子育ては地域みんなで」を合言葉に、多様な子育て支援に取り組んでいます。主な事業は、「ファミリー・サポート・センター事業」を瑞穂市・本巣市から受託しているのをはじめ、小規模保育所「まめっこ保育園」の運営のほか、子育て広場「キッズパーク」、託児付き講座「こっこクラブ」、子どもの発達が心配な保護者の交流会「りんくる」、中学生の保育体験授業などを行っています。

保育体験授業は2005年から次世代育成として、瑞穂市内3つの中学校で実施しています。少子化や核家族化が進み、赤ちゃんを抱っこした経験がないまま親になる人たちと出会ったことから、乳幼児とふれあう場は意図的に作らないといけないと感じ、中学校と連携し子育てを体験できる授業を始めました。授業では、中学3年生が乳幼児を1対1で保育します。今では、保育された子が中学生になり保育する側になったり、保育していた中学生が親になり自分の子どもを預ける側になったりという循環が生まれています。



「ファミサポ事業」は、2008年に瑞穂市、2011年には本巣市から受託し、利用料が払えない家庭のために「みつばち基金」を立ち上げて寄付を集め、利用料を減免できるようにしました。未満児の待機児童が多く、虐待が心配な家庭の子が入園できない状況を少しでも改善しようと、2017年には小規模保育所「まめっこ保育園」を開園しました。

他にも、研修会や講演会、映画会などを行い、虐待防止啓発や「子育ては地域みんなで」を合言葉に、赤ちゃんから青年までどの世代の子育ても孤独な子育てにならないための様々な取り組みを行ってきました。(2003年、2006年、2012年の3回WAM助成を活用しています。)

【この事業に取り組むまで】



4年間で地域に定着してきた定期預かり

未満児から入園する子が増える中で「無園児は、無援児で、無縁児」といわれるように、子どもが入園するまでが保護者が一番孤独になりやすい時期だと言われています。特に2020年からのコロナ禍で一層その傾向が強まりました。

当団体も、コロナのために中学生の保育体験授業ができなくなったことで、乳幼児親子に出会う機会が激減し、困っている親子、「助けて」を言えずに孤立している親子を把握しにくくなってしまいました。そこで、岐阜県の「孤独孤立対策官民連携事業助成金」への応募をきっかけに、2022年度から「定期預かり」を始めました。

孤独孤立対策のための定期預かり事業

2022年度
実施回数 32回
助成額 100万円



2023年度
実施回数 24回
助成額 100万円



2024年度
実施回数 40回
助成額 265万円
★交流会を設け保護者のつながりを意識



2025年度
実施回数 50回
助成額 325万円
★交流会を設け保護者のつながりを意識
★行政の制度へつながる

岐阜県孤独孤立対策官民連携事業助成金

WAM助成金 R6, R7

2022年度と2023年度の2年間は岐阜県の助成で実施し、その後、県の事業が縮小されてしまったためWAM助成を活用させていただき、事業規模を拡大、中味もより充実させて2024年度と2025年度と継続して取り組みました。2024年度には、それまで1クールは4回だったところを5回に増やし、5回目には親御さんの交流会を実施したことや、新規の利用者が目標を大きく上回ったことなどが高く評価されました。

この4年の間には、瑞穂市担当課に活動の様子を見ていただきその良さを認めてもらい、2026年度には瑞穂市の制度（乳児等通園支援事業）として継続できることになり、定期預かりの活動は地域に確実に定着してきたと言えます。



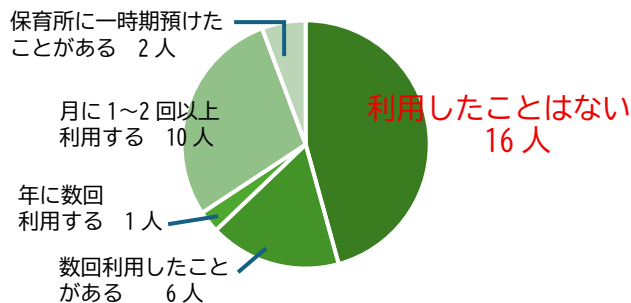
子育ては「助けてもらっていいんだよ」と伝えたい

子育て世帯の孤立対策としては、子育て広場や子育て支援センターなどが考えられます。当団体でも立ち上げ当初から子育て広場を継続していますし、行政が運営する子育て支援センターも充実してきており、親子で集まれる場所はたくさんあります。しかし、保護者が人との関わりが苦手であったり、母親にうつなどの精神疾患があったり、お子さんに発達の問題があったり、家族・夫婦間の悩みを抱えていたり、多胎児世帯や多子世帯であったりなど、広場等に出かけにくくなり、家庭にこもりがちになってしまう家庭は少なくありません。それは、子どもの姿が見えなくなるととても危険な状態でもあります。そこで、私たちは、子育てに不安を抱えている無園児家庭の保護者が、安心して人に子どもを預けられることで、「助けてもらえるんだ」「ひとりぼっちじゃないんだ」という安心感を得てもらいたい、また、少しの助けで、気持ちに余裕を持って子育てができるようにサポートしたいという思いから定期預かりを始めました。

そして、定期預かりをきっかけとして、人や制度とつながることで、孤独な子育てから抜け出し、地域の人たちと共に育てる子育てに進む一歩になるよう取り組んできました。

今までにファミサポや市の一時預かり、保育所などを利用されたことがありますか？

回答数 35件



定期預かりを利用するまで、子どもを預けたことがなかった保護者がおよそ半数いることが分かる。定期預かりを知って預けてみようと思ってもらえたことは、この事業が人や制度とつながる第一歩になったと考えられる。

子どもと離れるのは心配でしたが、楽しんで遊んでいて親以外の人との関わりができてよい経験になりました。

扉を開けると毎回笑顔で出迎えてくださったので、安心して子どもを預けることができました。

育児に追われて遅刻や忘れ物をしてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいだったが温かく接していただき救われました。預かっていた期間も、有意義な時間を過ごせたおかげで、お迎え後も心に余裕をもって子どもと過ごすことができました。

2025年度定期預かりアンケートより

【2025年度の事業について】



無園児家庭の孤立を防ぐ

今回の事業では、無園児家庭の親子が地域とつながり、気持ちに余裕を持って子育てができるようにすることを目的に、2024年度に引き続きWAM助成を活用して、「無園児家庭の孤立対策事業」を実施しました。この事業は、【1】定期的な子どもの預かりと、【2】ピアサポーターを生かした子育て広場事業とSNSでの相談事業の2つの柱立てで行いました。

2025 年度(R7)事業

無園児家庭の孤立対策事業

助成額

325万円



【定期預かり事業】

無園児の定期預かりは 5 回を 1 クールとし、各クールの最終回には保護者同士の交流会を実施した。1 回の預かりの定員は 6 人、時間は 3 時間で、給食を提供した。



【ピアサポーターを生かした子育て広場と SNS での相談事業】

ピアサポーター、スタッフ、保護者同士が交流を図る子育て広場「キッズパーク」を月に 2 回程度開催。公式ラインを利用した相談対応。



安心して預けられる手厚く温かい定期預かり

定期預かりは、0 才から 3 才（保育園等に通園していない未満児）を対象に、5 回を 1 クールとして 5 月～3 月全 10 クールを実施しました。

1 回の定員は 6 人で、預かり時間は 9 時半から 12 時半の 3 時間です。保育体制は、対応に配慮が必要な子がいる場合や、初対面でどんな子がいるかわからない状態で保育することを考え、保育者（保育士、子育て支援員、ファミサポの提供会員）が 1 対 1 の手厚い保育を行いました。実際に、この定期預かりで初めて保護者と離れるという子は泣き続けることもありましたが、保育者がずっと寄り添えることができたので、回数を重ねるうちに徐々に慣れていくことができました。一方で、保育者対子どもという関わりだけでなく、子どもと子どもが関わりながら過ごす時間も大切にしました。他の子の遊びが気になる様子が見られたときは、「一緒にやってみる？」と声をかけたり、おもちゃの取り合いなどが起きたり



した時は、安全にはもちろん配慮しながら、お互いの思いを尊重できるよう見守ることもできました。

給食は当団体が運営するまめっこ保育園のものを提供し、預かり終了後は、そのままお昼寝ができるようにしたので、保護者の負担が減らせたのではないかと思います。

送迎においては、基本的には保護者が行いますが、送迎手段がない、保護者の体調不良で送迎ができないなどといった場合には、スタッフが担えるようにしました。

このような丁寧な預かりを行うために、預かりが始まる前には毎回、保育者同士の打ち合わせを行いました。前回の子ども様子を振り返り対応の仕方を検討し共通理解したり、送迎時の保護者の対応についてアドバイスをしあったりしました。



定期預かりの利用実績

実施回数（全 10 クール）	50 回
利用のべ人数	300 人
利用実人数	50 人(40 家族)
新規利用家族	25 家族



↑ひとりひとりの思いに寄り添って過ごすことができる

受け入れ

9:30

・保護者から体調等の聞き取り



預かり

- ・定員6人
- ・1対1の保育
- 11:30ごろ
- ・和食の給食

←預かり前に子どもや保護者への対応を共通理解する
→運営する保育園の給食を提供

お迎え

12:30

・子どもの様子を保護者に伝える



【送迎の事例】2才の双子と0才の3人を育てている母親。双子が定期預かりを利用することになったのだが、母親は車を運転できなかった。瑞穂市は公共交通機関があまり充実しておらず自家用車の移動が主流のため、送迎だけでもかなりの時間がかかる。そこで、毎回スタッフが双子を送迎することにした。



本当に支援が必要な人に情報が届くように

定期預かりを利用された保護者からは、とてもよかった、もっと利用したいという声をいただいていますし、私たちもどんどん利用してもらいたいと思っています。しかし、定員や回数に限りがあることから、作成したチラシは広く配布するのではなく本当に支援が必要な家庭に利用してもらえよう、新生児訪問時に助産師さんからチラシを渡してもらったり、瑞穂市の子ども支援課や子育て広場と連携し、窓口での相談や乳幼児健診、広場を利用する際にチラシを配布していただきました。利用者としては、初めての育児で不安や負担が大きい家庭や、2人以上の未満児を家庭で保育しているケースが多くありました。

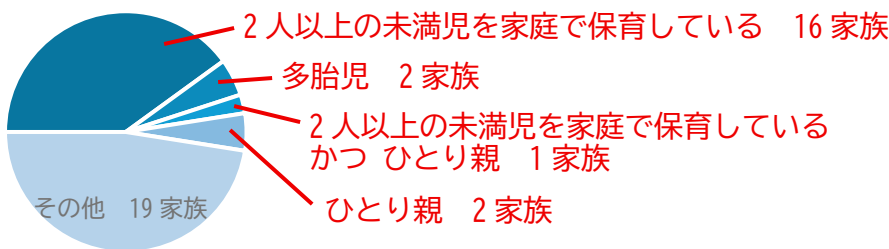
これまでの経験から、定員を上回る申し込みがあった場合に誰に利用してもらうか、定期預かりの利用がその保護者にとってどれほど必要かを判断するのはとても難しいことが分かってきました。そこで、今回の事業では、今までも行っていた事前面談に加えて、事前アンケートも行いました。

- ◆2人以上の未満児を家庭で保育していますか？
- ◆ひとり親世帯ですか？
- ◆パートナーは育児に協力的ですか？
- ◆近くに頼れる実家がありますか？
- ◆お子さんに対して育てにくさを感じたことがありますか？

などの質問をして、その答えによってポイントを設定。実際の面談での聞き取りに、ポイントという客観的な視点が加わったことで、より優先度の高い家庭に利用してもらえたのではないかと考えています。また、面談の聞き取りで様々な困難を抱えていることが分かった時は、瑞穂市子ども支援課にも連絡をして情報共有することもありました。



利用家族の属性



2人以上の未満児を家庭で保育している家族の中でも、多胎児や、ひとり親であるなど育児が大変そうな家庭に多く利用してもらえたことから、適切なアプローチができていたと考えられる。

【多胎児の事例】外国籍で2才の双子と0才の3人の子どもがいる家庭。父親はいるが一時帰国しており、母親は第3子を出産後、ほぼワンオペ育児をしている。乳幼児健診で定期預かりを紹介され、利用することになった。保育園の入園手続きにおいてもいろいろな壁があったので、瑞穂市の担当課とも情報を共有した。



交流会・KP・SNSでの相談を組み合わせた つながりを大切にした取り組み

定期預かりの各クールの5回目（最終回）には、保護者の交流会を行いました。

交流会では、子どもの痛癢や偏食など日ごろの子育ての悩みが話題になることが多いですが、この場は誰かに答えを求めるのではなく、交流会参加者の「私はこう思う」「こんなことを試したら、うまくいった」など経験やアイデアを聞く中で、「うちの子には、このやり方が合うかも」「その方法で試してみよう」など、自分で考えて決めていく場であってほしいと考えます。そのため、参加者が自分のことをたくさん語れる雰囲気になるようお茶やケーキを用意したり、スタッフ2人の他にピアサポーターにも協力してもらったりするなどの工夫をしました。ピアサポーターは、参加者と同年代あるいは少し上の子どもの育児中なので、同じ目線で育児のアドバイスをしたり、アイデアを考えたりすることができ、とても大きく重要な存在となりました。

今は、子育てにおける悩みや不安は、ネットで検索すれば多すぎるほどの情報を得ることができますがそれは一方的な情報です。交流会ではネット情報とは違い、実際の子どもの様子を交えながら話したり、他の保護者のリアルな経験を聞きその場で質問したりできることが、参加者にとってとても有意義であったと思います。

さらに、安心して何でも話してもいい雰囲気になってくると、普段は話しづらいような夫の育児に対する不信感や、保護者自身の子ども時代の親との関りなど、深い話に発展することもありました。その中では、虐待のおそれがある話があったこともあり、瑞穂市の担当課と連携して対処したこともありました。



↑交流会の様子。子どもの預かりとは別の部屋で、保護者だけで存分に話せる場。

交流会の参加実績	
実施回数	10回
参加のべ人数	24人

定期預かり利用者のうち約6割の保護者が交流会に参加した。交流会に参加しなかった約4割のうちの4分の1が「交流会は苦手」「交流会が必要だとは思わない」と答えている。

交流会に参加してくれた保護者は多くが「参加してよかった」という感想を持っていますが、なかには人との関わりが苦手で参加したくない、できないという保護者もいます。そういう保護者には、定期預かりを継続して利用してもらったり、子育て広場「キッズパーク」に誘ってみたりして、交流会以外でつながり続けられるよう心掛けました。

子育て広場「キッズパーク」（以下KP）は、月2回10時から14時に開催しました。KPは、スタッフの他、ピアサポーター（2人目3人目を育児中のちょっと先輩ママ）にも子連れで参加してもらうことで、保護者とのつながりをつくる場になりました。

キッズパークの参加実績	
実施回数	22回
参加のべ家族数	58家族



KPを行っている部屋は広すぎないスペースで、子どもを見守りながら参加者同士が交流することができます。無園児家庭の場合、我が子以外の子どもを見る機会が少ないので、「うちの子だけが偏食がひどすぎるのでは？」「うちの子は落ち着きがないのでは？」と「うちだけ」「自分だけ」と孤独になりやすい傾向があります。KPで色々な年齢、色々なタイプの子に出会うことで、自分の子が他の子とどのような関わりをするのかを知ったり、ちょっと先の成長に見通しを持ったりすることができ、「自分だけじゃない」と、育児に前向きになれたのではないかと思います。

定期預かりをきっかけに交流会に参加し、そこでピアサポーターや参加者と顔見知りになることで

KPの参加につながった保護者もいます。交流会の実施や、定期預かりの出口としてKPがあることは、孤独な子育てを防ぐ対策に大きく貢献したと言えます。交流会やKPが終わって部屋を出た後も、駐車場で保護者同士がおしゃべりの続きをしている様子を見ると、一緒に子育てをする仲間や場を求めているし、求められているのだと感じます。そして、それはネット上だけでは解決されないことだとも実感しました。

SNSの活用については、定期預かりの利用者には当団体の公式LINEに登録してもらい、気軽につながれるようにしました。当団体は、フードパントリー活動を行っているので、食品支援の相談から定期預かりにつながった家庭もありました。

現代、多くの保護者にとってLINEはメールや電話より断然身近で、相談ツールとしてもハードルが低い傾向があります。対面ではコミュニケーションがとりにくい保護者が、定期預かりの対応で気になったことをLINEで伝えてくれたことがあり、私たちの気づきのきっかけになったことがありました。SNSを活用することで、対面だけではできなかったつながりをつくることができました。

【事業の成果と今後の展望】



子育ての伴走者としてあり続けたい

下の表からもわかるように、この事業の成果としては、定期預かりや交流会、KPなどの相談事業を実施したことで、無園児家庭の孤立を防ぎ「育児は助けてもらっていい」「ひとりじゃない」と気持ちに余裕を持ってもらえたことです。また、2022年度から取り組んできた定期預かり事業は、この4年間で確実に地域に定着してきており、当団体がこの地域で、一緒に子育てをする子育ての伴走者として認識されていることも大きな成果です。

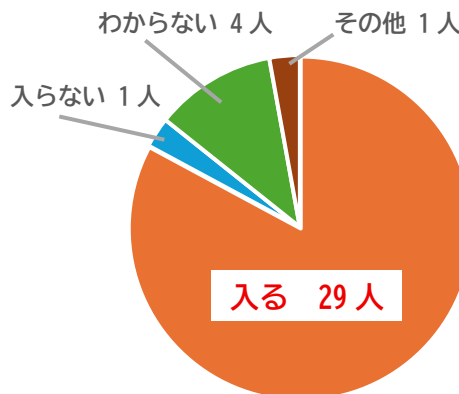
定期預かりを利用する前と後で、ご自身に変化はありましたか？

回答数 35件 複数回答

育児にゆとりが持てるようになった	29
日常生活に少しゆとりが持てるようになった	21
育児について話せる場所や機会が増えた	11
保育の様子を聞くことで、子どもとの接し方が変わった	10
今までは子どもを預けたことがなかったが、預けてもいいと思えるようになった	8
定期預かりをきっかけに、外出する機会が増えた	6
育児の不安が減った	3
あまり変化はない	1
育児の自信が増した	0
子どもを預けることがストレスになった	0
定期預かりの準備や送迎など負担が増えた	0
他の子を見る機会が増えて、自分の子と比べることが増えた	0

今後、子育てのことなどを話したい時、相談したい時、その場所としてキッズスクエア瑞穂は選択肢に入りますか？

回答数 35件



2025年度定期預かりアンケートより

私たちは、この事業が「乳児等通園支援事業」を行政主導で実施できるまでは、何らかの形で必要な事業だと考え、2022年度から継続して取り組んできました。そしてこの4年間で、行政に視察に来ていただくなどの働きかけや、実績を積み成果を生み出しながら必要性を伝え続けてきました。その結果、2026年度には、瑞穂市の「乳児等通園支援事業（誰でも通園制度）」の認可を受けて継続できることとなりました。

今後は、私たちがこれまで積み上げてきたノウハウを行政と共有しながら、また、行政の制度では対応しきれない事案にも柔軟に対応できる私たちの取組みも生かしながら、市民ならではの地域に密着した支援事業になるよう取り組んでいかなければいけないと思っています。

そして、当団体が現在行っている、ファミサポ、フードバンク活動、子どもの居場所、障がいを持つ子の親の居場所、子育て世帯訪問支援事業、保育体験、小規模保育園事業など多様な事業の中で出会う子育て家庭が、いつでも相談できる場としてキッズスクエア瑞穂が必要とされる存在であり続けていきたいです。

NPO 法人
キッズスクエア
瑞穂

〒501-0204
岐阜県瑞穂市馬場春雨町 1-49
TEL/FAX 058-326-2236
Email kids.sq@dream.com
WEB <http://kidssq.org>



2026.3

もっと みんなで♡



キッズスクエア瑞穂のマスコットキャラクターは
もっくん・みいちゃん
子育ては、親だけじゃなくて、もっとみんなで！
もっとみんなで、楽しもう！しゃべろう！遊ぼう！関わろう！
というメッセージ